

平成 30 年 1 月 25 日

「6 カ年間の島内小学校へのサンゴ礁学習活動で見えてきた課題と提案」

目的：

2012 年よりスタートした島内小学校へのサンゴ礁学習活動「わくわくサンゴ石垣島」は、2017 年までの 6 カ年間で、述べ学校数 38 校、述べ学習人数 1,269 人に対してサンゴ礁学習の支援活動を実施した。本提案は 2012 年度から 2017 年度までの活動を通して見えてきた課題を提示すると共に、これから同様の活動を計画・主導される団体、関係行政、支援団体に対し共有出来る提案となる事を期待し作成する。

経緯：

「わくわくサンゴ石垣島」は、地球規模での気候変動及び社会活動の変化などにより、将来的にサンゴ礁の社会的価値が変化するとの観測を活動動機としている。これは「失われつつあるサンゴ礁」という現在の趨勢に対する危機意識だけでなく、希少価値が高まる地域固有資源としてのサンゴ礁という側面も捉えたものであり、本地域の将来に渡る意思決定（持続可能かどうか立脚した意思決定）に深く関わる課題であるとの共通認識を基にしている。よって、石垣市内の小学校という公共的教育機関に紐付けた活動を主とすると共に、地域社会への波及効果を目指した取り組みでもある。尚、この取り組みに関しては、サンゴ礁学会（2013 年）、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会（2012～2016）、石西礁湖自然再生協議会（2012～2016）において活動発表を行っている。また、活動資金として、日本財団、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会、石西礁湖サンゴ礁基金より支援を頂いた。

2012 年～2014 年

「わくわくサンゴ石垣島プロジェクト」

連携団体 八重山漁業協同組合サンゴ養殖研究班
石垣島沿岸レジャー安全推進協議会
白保魚湧く海保全協議会
沖縄エコツーリズム推進協議会
地域広報サポート石垣島

協力 石西礁湖自然再生協議会
環境省石垣自然保護官事務所
石垣市教育委員会
八重山漁業協同組合
WWF サンゴ礁保護研究センター
石垣市観光交流協会
石垣市商工会

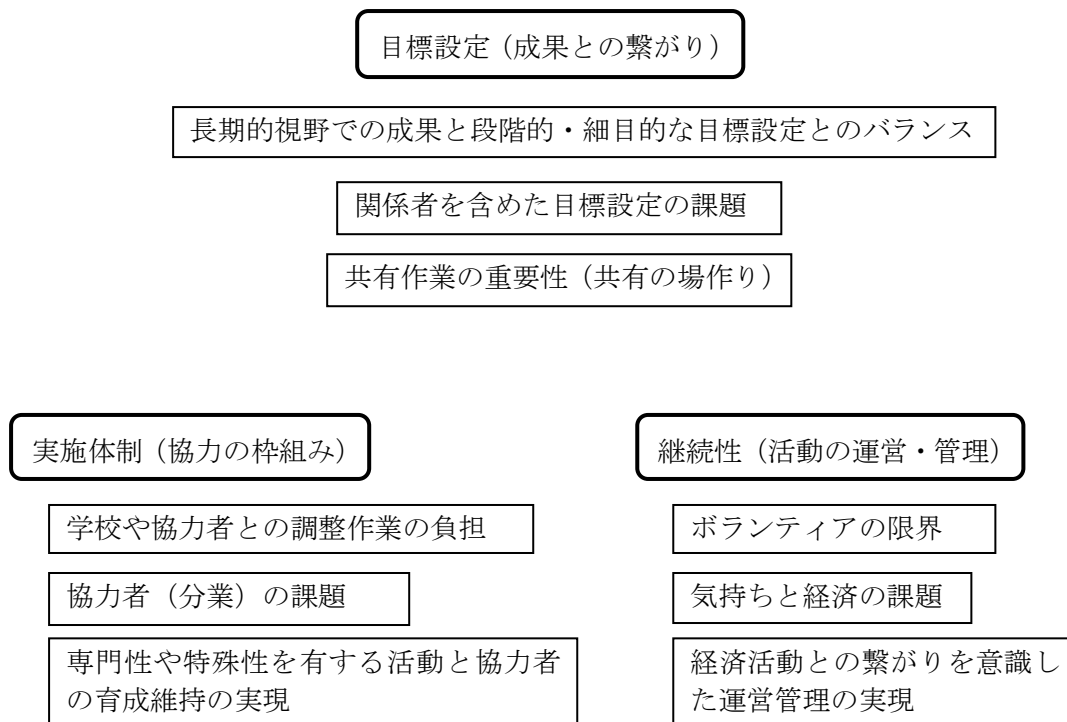
2015 年～2017 年

「サンゴ学習推進団体・わくわくサンゴ石垣島」

代 表 山中邦弘

課題：

< 課題の要点 >



目標設定の課題

2012～14年までの活動目標は石垣島の全小学校21校へのサンゴ礁学習支援であり、サンゴ礁に関する基礎的な認識の普及を視野に入れていた。続く2015～17年ではプログラムの体系化を目標とし、より充実した体験的な学習の普及を目指した。どちらの活動もその成果を将来的なものとして捉えており、次の世代への期待を含むものであった。がしかし、学校授業の中で行う活動は学校長や担当教師の要望する成果目標を取り入れる事が前提であり、またこれらは各学校により異なる。そのような中でより大きな成果へと繋げていく為には、実現すべき成果へのロードマップを関係者間（学校、保護者、地域、行政、外部専門家など）で共有する枠組みが必要である。その中で限定的な対象者（学校）または限定的な活動内容（学習項目）を位置づけていく事で長期的成果との関係性を認識する事が出来る。上記のような関係者間での共有作業の枠組み作り（共有の場作り）には、主活動とは別次元で大変な労力と時間が必要となる。これらの作業を負担するセクターの必要性を強調するとともに、今後の課題として提示したい。

実施体制の課題

サンゴ礁学習の範囲は多岐に渡ると共に、多面的な視野の提供及び主体的視点の形成が重要である。これらは教室内での座学やアクティビティ、フィールドワークなどの体験活動の組立によって実現する事が出来るが、海洋（サンゴ礁）という専門性や特殊

性に起因したコストも存在する。海洋フィールドワークでの専門スタッフの人的費用や船料、サンゴ水槽学習などの維持運営コストなどがそれであり、これらを含む実施体制を民間の学習活動主体が保有する事は予算的に不可能である。現状は、これらのコストを経済（営利）活動によってねん出している外部の協力者への依頼する事で学習プログラムが実現されている。こうした専門性及び特殊性を活用した学習プログラムを学校教育に取り入れる事はとても効果的（海洋環境で共通体験を得る事など）ではあるが、実施体制として組み込むには協力者との細かな調整作業が必要となる。協力者との継続的かつ発展的な関係構築を実現する為のインセンティブを学習活動の長期成果と合わせて共有・組立していく事が今後の実施体制作り求められる。

継続性の課題

サンゴ礁学習に限らず公的活動に対する参加者または協力者が求めるインセンティブは様々である。本活動が学校教育の中で行う活動である以上、参加者または協力者にはボランティア精神（公的な取り組みに対する主体的な気持ち）が必要不可欠であり、そもそもの活動源泉として位置付ける必要がある。そうしたボランティア精神（気持ち）に応じたインセンティブとは何か？活動主体はそこを掘り下げて提示する必要がある。一方、公的資金を活用した事業に発展していくと、仕事として報酬を得ると共に責任を持って行わなければならない側面も発生する。ボランティアの発展として、そうした役割を担う参加者または協力者を作り出すと同時に、それを社会が求める形で実現する事が試される。また、地域社会に対してサンゴ礁との関わりから生まれる利益を明示し、民間の経済活動を取り込む事も必要となる。それらは企業が持つ継続的かつ循環的な活動と連動する中で社会的価値を創造する仕組みであり、このような側面を重視して活動していく事も求められる。継続する事を人の営みと言えるのであれば、本活動はサンゴ礁と人との営みが続く限り求められる活動と位置付ける必要がある。

提案：

上記課題を踏まえ、以下の提案と要望を行う。

愛知県碧南市には教育委員会が運営している水族館（碧南海辺水族館・碧南市青少年海の科学館）があり、長年に渡り碧南市小・中・高校への学習提供や職場実習を行うと共に、愛知県と連携し希少野生動植物種の保護・保全を推進している。尚、碧南海辺水族館は碧南市臨海公園の中に位置しており、碧南市の社会インフラとして整備されている。

本市及び本地域においても、サンゴ礁利用の窓口として、サンゴ礁学習の実施施設として、サンゴ礁（種）の保護・保全の施設として、その他シンポジウム開催など交流促進の施設として、関係行政が連携した海浜公園等の整備（水族館施設を含む）を提案・要望する。

<提案書作成者>

わくわくサンゴ石垣島プロジェクト（2012～2014年）

小林鉄郎（八重山漁業協同組合サンゴ養殖研究班）

大堀健司（石垣島沿岸レジャー安全協議会）

上村真仁（白保魚湧く海保全協議会）

福澤明美（地域広報サポート石垣島）

※（）は活動当時の所属団体名を記載

サンゴ学習推進団体・わくわくサンゴ石垣島（2015～2017年）

笠原利香、三輪千夏、大堀則子、崎山絵里子